

「念仏もうしそうらえども、踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」と、もうしいれてそうらいしかば、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり。よろこぶべきころをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

第4組 瑞雲寺住職

小泉 元瑞

text by Genzui Koizumi

## 第9章「他力の悲願」

### ありつる不審

第九条は、「如来よりたまわりたる信心」と一度は願いたはずの本願力回向の信の中身を、問答の形をとって再吟味する重要な一段です。唯円の、往生への不安な心情が吐露されます。歡喜の心、さらには浄土往生を願う心が希薄であることが問いの内容です。歡喜については、すでに『大経』などの經典に明らかのように、信心獲得のしるしとされます。唯円は宗祖の教えに会い、かつて信の喜びも体験し、しかも長く宗祖のお育てに預かってきた身です。おそらく「今さらこういうことを聞くのはお恥ずかしいのですが…」と、師の叱責すらも覚悟して、おずおずとした心持でお尋ねしたのでしょう。ところが宗祖の態度は諭したり、まして叱責でもなく「親鸞もこの不審ありつるに」と真っ先にご自身の名をあげ、「唯円房おなじころにてありけり」と、意外にも同感されたお答えでありました。曾我量深先生は「も」の一字について、宗祖の凡夫の自覚の表明であり、『「つる」とは、その不審がずっと前より今日まで連続し現在している』（『歎異抄聴記』）ことに着目されています。弟子の唯円は、心の内を告白された師の偽りのない態度に、深い感動を覚えたことでしょう。ここに信における問いを共有した、師弟における御同朋としての交わりを教え

られます。

## 煩惱の所為

かつて聞いたことに、私たちのいう「凡夫」の了解は、「どうせ凡夫」か「えら凡夫」でしかない、というものでありました。「どうせ凡夫」とは劣等感の中で開き直っていつきの凡夫であり、「えら凡夫」は仏法知り顔でいつきの凡夫のことでありましょう。しかし煩惱とは人間の考えたような、ある特定の心の状態などではありません。断じたり減じたりできるものではないのです。私たちは、身の事実である「煩惱具足の凡夫」ということに、もっとも頷けません。ですから唯円もたまわりたる信と知ってなお、まだどこか自分の心が起こすものである、ということが拭いきれないのでしょう。信を得ればこうなるはずだ、という期待をもって念仏者像を想定するような心では、本願のお意はいただくことはできません。その意味で、この問いは確かに真摯ではありますが、悲しいかな本願を疑っているのです。念仏の法を難信というのは、信ずることが難しいというよりも、如来回向の法に人間の分別を差し挟もうとすることを、問題とされているのです。

## 既にしています悲願

「仏かねてしろしめして」いる、つまり仏が真実方便の願心を興された理由は、積善やいわゆる心の持ち様などでは、まったく成仏不可能な「煩惱具足の凡夫」のためであると示されます。つまり『大経』にいわれる信の喜びとは、仏の智慧の念仏によるものです。私の思いや生き様の善し悪しに先立って、この身そのものが仏の智慧に包まれてある、ということを感じしめるお言葉です。喜ぶべきことを喜べない身のすくいをこそ、仏はすでに案じて開いてくださったのが、念仏往生の道なのであります。踊躍歡喜の心やいそぎ往生したいなどということは、かえって煩惱のないことになります。有漏の凡夫の身が、聖者になることはありません。しかし念仏において、往生を果遂せしめんという仏の大悲心によって懺悔する心こそが、歎異の精神でありましょう。ですから「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこころにてありけり」、この一句は第九条の中心であると思います。